

広報は、中学校生徒会に委託して各家庭に配布しています。(発行予定日毎月20日) 広報への意見や話題などをお知らせください。

'83/6月 301号

わたしたちの町
人口(男)4,569人 (女)4,918人
合計9,487人
5月中の転入13人
転出31人
世帯数2,314世帯数
(58年5月末日住登録調べ)

五月二十六日日本海中部地震

この海に悲しみ深く 南小学校13児童が殉難



五月二十六日正午、秋田沖でマグニチュード七、七の地震が発生。社会見学の途中、海岸で昼食をとろうとしていた南小学校の四、五年生四十五名が津波にのみこまれた。遺棄現場の男鹿市加茂青砂のみさんの必死の救助の中で、十三名の児童が殉難。無言の霊塔にまつまされた。

男鹿市加茂青砂海岸で

もう一度大きな声を

児童代表 五年 福岡 真理子

わたしたちは、運動会にはいっぱいがんばりましたね。いっしょに大会を夢みながら、社会見学前には、田植えもすませましたね。

そして、五月二十六日、社会見学の朝、校長先生にVサインを掲げ、「みやげ話をたくさん持ってきてます」と元気に出立しました。

青々とした海と静かな波が、「ようこそ、合川南小のみなさんお待ちしていました」というようにわたしたちを心よくむかえてくれました。

広々とした海をすばらしくと羨しさに、思わず両手を大きく広げ、深呼吸したわたしたちで、「お母さんが、心をこめて作ってくれたお弁当を食べるのが、とても待ちどろしいです。」

目を降ると、海がめざして一目散に走り出しました。何日か前から夢にまでみていた海に向って、友だちと一番よい場所を探し、ごはんを食べる準備をしていた時、急に大きな波が岩にぶつかってきました。

後ろから「逃げろ逃げろ」と、さけぶ声がヘッドして、夢中で逃げましたが、波は、あとから追いかけて、わたしたちを追いかけ、広い広い海にすいこんでしまいました。「お父さんお母さん、お母さん助けて」と力いっぱいさけびました。

それこそ波は、わたしたちを息をつくこともできない暗い暗い海の底にすいこんでいきました。わたしたちは、みんないい子でした。仲よしのいい子でした。それなのに、どうしてあんな悪運におそわれたのでしょうか。くやしくてくやしくてなりません。

十三人のお友だちをしのんで みんな仲間でした

児童会長 六年 御所野 真

五月二十六日、それはわたしたち合川南小学校にとって、楽しい日であつたはずでした。六年生は函館へ、四年生五年生は男鹿方面へ、三年生は大館方面へ、一年生二年生はたかの方面へ、四年生五年生の男鹿方面へ社会見学というはすばらしいことでした。

楽しみにしていた海の中で、みなさんが、あの悲惨なことになってしまったのです。信じられませんが、今も海のむこうから元気に泳いで来ようとしてるようです。

狂食がつかず、食べようとして行つたみんな。僕たちも船の中で津波を見ました。その時、あの大津波がきたのです。お母さんの作ってくれた心のこもったお弁当を食べるひまもなく、みんなをあの津波がおそったのです。

お父さん助けて、お母さん助けて、先生助けて、もがいて、もがいたことでした。力つきた十三人は、その名簿になつて、仲よくすこすこ生きています。

わたしたちに残された九十五名は、これからみなさんの分も力いっぱいがんばります。仲よしのいい子になります。仲よしのいい学校にするようにがんばります。

もし、わたしたちがくじけそうになつたり、なまけんばしていたら、「がんばれ、しっかりやれよ」と、天国から大きな声でしかけてください。

わたしたちは、天国で十三名のみなさんがお祈りしてくれていることを祈っています。柳子さん、民子さん、兎子さん、史郎さん、宗昭さん、久也さん、綾子さん、紀子さん、有希子さん、卓也さん、岳彦さん、正義さん、忍さん、どうぞ天国でやすらかにやすみください。

町長日記から

五月二十六日は、合川町民にとって忘れられない日です。大きな日となつた。地震津波で合川南小の四、五年生十三名が殉難。喜びいっぱい海の底に消えていきました。無惨な死の現場となつてしまつたのだ。生きて帰つたものも、助かったものも、助かるとは、すばれて助けられたのだ。

今さらながら男鹿市加茂青砂の人々の必死の救助に感謝しなげればならない。遺体の発見にもダイバーを中心にして、がんばつてもらつた。こうなると山の人々は避難に対して、何ひとつできるものがなかつた。私どもは人の情(なまきけ)を

つづくべきかと思ふ。合川南小で行われた五日の合同告別式、そして十二日の現地慰霊祭等、現地と町と二つに分れて訣別(けつべつ)の行事が持たれた。

この間、全国の人々からあなたかにお見舞いいただいた。たいげない児童の死は、わが事に置き換えてみて人々の涙を誘つた。

再びあつてはならぬ地震津波の犠牲者として人命の尊さ、安全の大切さを全国民が胸に刻むことのできたとしても、あつたにも大きな傷であつた。

